

遙かなる風雪

④

実録・柴田音吉洋服店

電気灯のついた年——「必ず成功してみせる」

機は熟した。

洋服は一部貴族階級の衣服から、次第に中産階級の間に根を下ろしはじめていた。

明治16年、いまの元町3丁目の浜側に柴田音吉洋服店の看板がかげられた。「必ず成功してみせる。成功するに違いない…」音吉30才、勝負の第一歩である。

天性の、人に好かれる素質が、この童顔の洋服店主にあったと人はいふ。

いきいきと活気に満ち、カンが良かった。人情味があり親切だった。おだやかでトゲがなく、そのくせ馬力があった。人を信じ、決してクヨクヨしなかった。何よりも音吉の魅力を支えたのは、深い自信に裏付けられた、成功への想像力と信念であったという

この店主の魅力と相まって柴田の洋服はまもなく評判をとった。着やすかったからだ。着物から洋服へ、この過渡期を音吉はそのカンの良さでよく捉えていた。

「きゅうくつなものは、着る気にならん。だから、作る気にならん」。

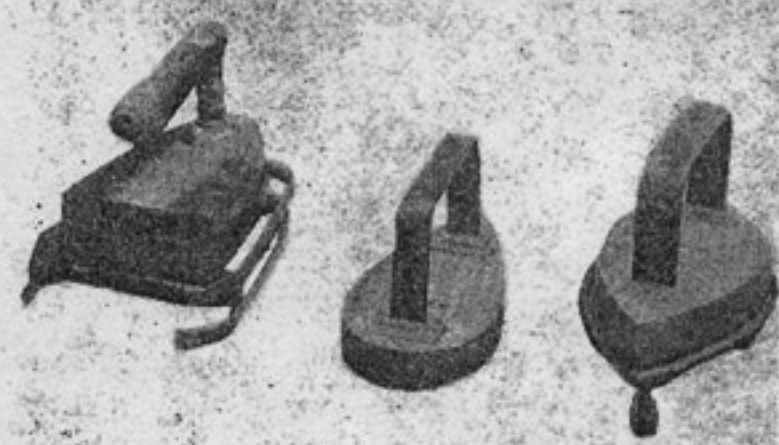
この素朴な発想は、体格の良かった音吉自身の、自然な気持から出たものに違いない

同時にそれは、タモトのある衣服に馴れた人びとの気持でもあった。ゆったりと着やすい柴田の服が評判になった道理である。

× ×

「暗い。もっと明るいランプはないものか……」。

この仕事に夜なべはつきものだった、というより音吉には「夜型」のところがあった。夕方からの仕事は気分が乗る。だが少し時間が経つとランプのあかりでは、細かい針



初期のアイロン。炭火で熱して使用

の目はともすればカスんでいく。

その音吉の願いが、現実のものとなった。

この年の大みそか、神戸の居留地海岸は、興奮に包まれた群衆で埋めつくされた。

「電気灯」の兵庫県主催、公開点火試験を見に集った人びとである。10才になるひとり娘しげの手をひいた音吉の期待に満ちた目も、その中にあった。

東京で、初めて点火に成功してから5年、神戸海岸が文明の脚光に燦然と輝やいた一瞬である。市街地に電気がつきはじめたのは東京より1年遅い明治21年11月3日からだった。

× ×

明治が20年代に入るまで、洋服はなお、中産階級のものとして地位の象徴だった。制服ですら「高級」なものとして庶民の目に映っていた。

明治19年、帝国大学大学院とその分科大学は学生服制を施行したが、これはツメ衿ではなく、短かいセビロ衿、チョッキ、その下にワイシャツとネクタイというスタイルだった。

これより先、明治5年にはすでに慶応義塾内に衣服仕立局が創られ、塾生の学生服を



炭火を中に入れる改良型

縫製していた。学生服一揃いの値段は、10円前後だった。新しく各地に開通した鉄道の職員、乗務員も紺ラシャの制服を着て、その時代の先端をゆく職種を誇示したものである。

服地はすべて、「舶来」だった。ミシンも、アイロンもヨーロッパから運ばれた。

ドイツ製の、手動ミシンは真ちゅう製の輪のついた金属台のもので、値段は15円前後だった。

細かいところまで縫えないので手縫いが主である。根気のいる、ち密な仕事ではあったが、やがて各地にぼつぼつとその「名人気質」の職人たちが育っていった。

(つづく)

岡和子記者